

大統領になる気はなかった男・ドナルド・トランプ氏

暴露本『炎と怒り』に

込められた真実と波紋

ジャーナリスト ワシントンDC在住

五十嵐 光

変わったのはヘアスタイルのみ

トランプ米政権の内幕を描いた暴露本『Fire and Fury (炎と怒り)』に予約注文が殺到、ネット通販のアマゾンや、バーンズ&ノーブルなどの各書店では飛ぶように売れている。

これを受け、版元のヘンリー・ホルトは増刷に乗り出した。

この本は、ホワイトハウスが出版差し止めに動くと察知されると、前倒しで出版され、アマゾンのベストセラー・ランキングで首位独走した。ワシントンの本屋には在庫がなく、筆者は電子版を入手した。

本書で思い出されたのは、30年前に出版されたトランプ氏の自伝『The Art of the Deal』のゴースト・ライター、トニー・シウオーツ氏のことだ。

2016年、大統領選の真っ最中、トランプ氏は「自伝」を掲げて、「こ

の本を書いた男は大統領になるべきだ」と、大観衆を前に叫んでいた。

それをテレビで見っていたトニー氏は一瞬、自分が大統領になるべきだとトランプ氏に言われたのかと錯覚しつつも、30年前の苦勞を思い出した。

トニー氏はトランプ氏の自伝を執筆するに当たり、一年半の日数をかけ、数千時間をこの億万長者と共に過ごした。従って彼は世間が知らない、トランプ氏の人を迷わす魅力や大きな欠点を知り尽くしている。

いわく、トランプ氏は究極のナルシストで、世界は自分を中心に回っていると考えている。本を読まず、情報は総てテレビから得る。実は派手な社交生活はイメージ作り以外にはやらず、酒も煙草も口にしない。家に帰って独りになるのが好き。

外に一步出ると「ドナルド・トラ

ンプ」という役を演じてブランド・イメージを守る。仕事中毒。部下からの報告書は読まず、口頭での報告に対して決断を下す。集中力には欠けるが、交渉ことは好き――。

しかしながら、トニー氏はそれらの真実を封じ込め、美しい自伝に仕立て上げた。多くの読者はこの素晴らしい成功談を読んで、トランプ氏を、カリスマ性に富みざつくばらんで、ビジネスに関して、並外れた天分を持つ企業家として印象づけられたのである。

それでもトニー氏は、まさか、あの彼が大統領本選挙で勝つわけはない、と自分自身を納得させて来たようだ。

ところが、2016年末に大統領になる可能性が見えて来るのに従い、気が気ではなくなつて来た。

そして、彼を米国大統領にしてしまふのはあまりに危険だと感じたト

ニー氏は、雑誌やテレビで発言し始めたのである。

トニー氏によると、問題はトランプ氏のイデオロギーではなく、彼の性格だ、と言う。

イデオロギーなど持つておらず、病的に衝動的であり、ナルシスト(自己陶醉型)なのである。

この大統領選の頃から取材していたというマイケル・ウォルフ氏が、今回の暴露本で明らかにしたことは、トニー氏が30年前のトランプ氏の行状として暴露したこと、それほど遠くはなかった。つまり、トランプ氏は、ここ30年ほど成長することはなかったのである。

本は読まずに、情報はテレビから得て、酒もタバコもやらずに、マクドナルドばかり食べている。そういう男なのである。

変わったのはヘアスタイルのみ。髪が薄くなった彼は頭皮を釣り上げる

手術をしている。これも今回、暴露された。

『Fire and Fury』が出版されると、トランプ氏は早速ツイッターで反撃し、さらに記者会見では、著者のウォルフ氏のことを「詐欺師」と呼び、この本は「完全なフィクション」であり、「私はこれを侮辱と受け止める」と話した。

しかし、これが逆効果で本の販売促進となったのは皮肉だ。乗じてウォルフ氏は、各局のテレビに出演して、自著をプロモートし続けている。「トランプの側近は、皆が、100%と例外なく、大統領は子供じみて」と答えている」など、ウォルフ氏の発言も次第に激しさを増している。NBCの報道番組では「米憲法修正第25条」に該当するような問題だと発言した。

第25条では、現職の大統領と副大統領の死亡や辞任、あるいは職務

不能になった場合の手続きを定めている。

トランプ政権の1年目のほとんどの期間を通じて、ホワイトハウスの広範囲にアクセスを許可されていたウォルフ氏は「トランプは大統領に「適していない」と自身の著作を宣伝しながら言った。

ワシントンの住人は冷めた顔

ウォルフ氏はトランプ氏がテレビを観ることを知っている。恐らく面倒なので、書籍には目を通さないだろうと見越していること、テレビでも繰り返し、ホワイトハウスでトランプ氏は「子供」「間抜け」「阿呆」と見なされていると暴露した。

黙殺すればいいのだが、合衆国大統領であるトランプ氏は、すぐこう返した。

「私は非常に成功したビジネスマンからトップのテレビスターになり、初出馬で大統領になった。これは単に頭がよいということだけではなく、天才と呼ぶに値すると思う。しかも、非常に安定した天才だ」

トランプ氏は、暴露本のためのインタビューをウォルフ氏に許可したことは一度もないと話し、大統領が

「だらしないステイブ」と呼ぶ、前顧問ステイブ・バノン氏がホワイトハウスへのアクセスを許可したと責めた。

ホワイトハウスで200人ほどインタビューしたというウォルフ氏は言う。「皆が口を揃えて言うのは、トランプがその場で満たされないと、駄々をこねる子供だと言うことです。このトランプは活字を読まず、人の話を聞きません」

ホワイトハウスのスポークスマンであるサラ・サンダース氏は、同著作には「間違だらけの創作だ」と話していた。

一方で、ワシントンの住人にとつては『Fire and Fury』に書かれていることは何ら目新しいものではなくて、(まあ、そうでしょうな)という程度の受け止め方で、驚きはない。2016年の大統領選の終盤にカメラがアウシた。

1980年代に、トランプのゴーストライターを18カ月もやっていた、シウオーツ氏の発言を再び思い出す。

「どのような話題をふっていても、インタビューが5分と続くことはありませんでした。彼は一つのテーマに

集中することができない性格で、過去のことを聞いても『終わったことを話してもしょうがない』と怒り出す始末。まるで教室でじっとしてられない幼稚園児のようでした。トランプ氏のような人物が、核ミサイルのボタンを押す決定権を握っているということは、恐怖以外のなにものでもありません」

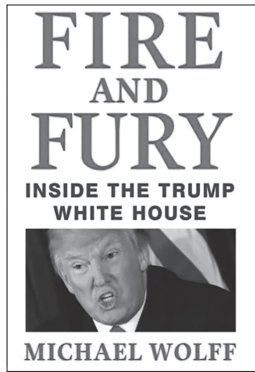
この発言の頃から取材を続けていたウォルフ氏は、大統領選で敗れる側のレポートをする目的でトランプを取材していたのだが、と言うのも、トランプ氏自身も愛娘イヴァンカ氏も、PR目的で大統領選に出ていたのである。

だから実際大統領になった時は愕然としたという。

トランプ氏は負けると考えていたし、大統領の仕事には興味がなく、政治経験も皆無だったので、政権の人材や閣僚については全く考えていなかった。

トランプ氏とイヴァンカ氏は茫然自失となり、妻のメラニア氏は泣き出したと言う。

実は大統領になる気はなかった男だった、という部分がこの暴露本の肝かもしれない。



『Fire and Fury』